



# 教職大学院

## Newsletter No.

# 16

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

09.09.30

## 確かな実践を持ち寄り，力量を高め合う集団を求めて

富山大学人間発達科学部教授 松本謙一

私は、大学卒業後 20 年間小中学校の現場経験があります。中でも『個の追究』を核にした実践研究を戦後一貫して続けている富山市立堀川小学校の 12 年間は、多くの先輩や同僚、そして子どもたちから多くのことを学ばせていただきました。その経験が、今の自分の礎になっています。

初めて小学校 1 年生の学級担任をさせていただいた時のことです。生活科で朝顔を育てさせました。自分の鉢にもすきな絵を描き、朝顔さんへのお手紙も付けて、一生懸命育てさせた（つもりだった）のです。

一人一鉢なので、もし、その子どもの朝顔が枯れてしまったら大変です。なぜなら、朝顔の命はもちろんのこと、学習が成立しなくなると考えられるからです。私（担任）は、子どもの下校後、土日も、欠かさずにチェックし、必要な鉢に水やりを続けました。

6 月下旬、きれいな紫色の花が一輪咲きました。たった一輪ですが、子どもたちが笑顔になる瞬間です。初めて咲いたのは、A さんという女の子でした。「先生、私、毎日ね、『早く咲いてね。きれいに咲いてね。』ってお話ししながら、お世話したの。そしたらね、一番にこんなにきれいに咲いたんだよ。……。」みんなの前でうれしそうに話す A さん。まわりのみんなにもうれしい空気が漂っています。私（教師）も、「ああ、それはよかったね。一生懸命お世話していたからだよ。……。」と共感的に受け止めました。みんなで A さんの喜びを共有し、すてきな時間が流れていきます。

次の瞬間でした。隣の B 君が、「俺なんか、一回も水やりせんけど、明日咲きそうや。」とつぶやくのです。私が、

子どもが帰ってから水やりしていたなんて何にも知らないで……。私ははっとさせられました。『いったい、私は何の先生だったのでしょうか。朝顔の医師??』。朝顔が死なないように処方箋を作ってやっていた。でも、その結果、育てるべき子どもは、世話しなくても花が咲くということを知ってしまったのです。

一体、学校教育は、誰の何のためのものなのでしょうか。いつも、根源に立ち戻らされます。『教師のねらいと子ども一人ひとりの願い、これをどう絡め、両者にとって価値ある授業を生み出していくか』確かにこれは永遠の課題かもしれません。しかし、確かな実践を持ち寄り、高め合おうとする教師集団・研究者集団がきちんと機能すれば、実践を通しての子どもからの学びは、人間としての喜びに深めることができるのです。

私も長年、福井大附属小学校の研究やラウンドテーブルに携わらせていただいています。そして、子どもに学ぶ皆さんの謙虚な姿勢や確かな事実を大切にしたい学び合いの姿に、日本の教育の逞しさと可能性を実感している一人なのです。

### 内容

- 確かな実践を持ち寄り、力量を高め合う集団を求めて(1)
- 福井大学教員免許状更新必修講習を終えて(2)
- 拠点校だより(4)
- 院生紹介(5)
- 国際フォーラム予告(10)

# 福井大学教員免許状更新必修講習を終えて

更新講習始まる ー新しい教師教育の予感ー

長谷川 義治（福井大学教職大学院）

平成 19 年 6 月の教育職員免許法等の改正に伴い、「教員免許更新制」が導入され、本年度から教員免許状更新講習が実施されることになった。福井大学では、昨年度の予備講習の実施状況や受講者評価結果を踏まえ、特に、必修領域の講習については、少人数グループでの話し合いを基本にした、「福井大学方式」で実施することにして、準備を進め、8 月末までに 5 回の講習を実施してきた。その概要を報告する。

## 1 はじめに

福井大学は、平成 20 年度に教職大学院を開設した。新しい教師教育の展望をミッションとして掲げ、学校拠点という形態を取り入れながら、学校改革の協働研究を推進することで教師の実践的な力量形成を目指している。

そのような状況の中で、平成 21 年度から教員免許更新制が導入され、免許更新講習の実施に当たっては、教師自身のモチベーションを高める絶好の機会であるにとらえ、特に、必修講習については、教職大学院のスタッフを中心にして、教職大学院のカリキュラムとある意味で相似形の講習を企画することにした。



## 2 福井大学方式

本方式の特徴を挙げると、①必修 12 時間に選択 6 時間を加えて 18 時間（連続 3 日間）の講習にしたこと。②教職大学院のノウハウを生かした「省察」型講習にしたこと。すなわち、多人数伝達型の講義よりも、少人数グループによる話し合いを基本にしたこと。③校種、年齢、教科等の壁を超えたクロスセッションを中心にしたことなどである。

## 3 講習の概要

上記①については、もちろん、必修 12 時間だけの受講も可とし、両者合わせて 1 回の受講定員を 120 人とした。受講対象者が、当初、約 600 人と見込まれていたため、年間で、嶺北 5 回、嶺南 2 回の計 7 回実施するよう計画した。なお、実際の受講申込者は 483 人で、全受講申込者のうち 18 時間を希望した者の割合は、70.5%であった。

②については、現職教員の専門職としての豊かな経験に敬意を払った講習にしようということで、グループは 5 人編成とし、実践等をじっくりと語り合い、聴き合うスタイルにした。しかも、各グループには、大学教員や現場経験が豊富な協力者（校長 OB 等）を 1 名ずつ配置した。協力者は、延べ 76 名にもなった。この協力者については、現職の校長・教頭等にも加わっていただいたが、このような形式で実施できたのも、県教育委員会・市町教育委員会の教育長さん方の御理解・御協力があったお陰であると感謝している。

なお、受講者評価については、「講習の内容・方法」「知識・技能の習得の成果」「運営面」の 3 項目について回答してもらっているが、7～8 月実施の 5 回分（受講者数 435 人）の「教育実践と教育改革Ⅰ」（必修）の全体平均は、「よい」が 40.8%、「大体よい」が 48.9%、「余り十分でない」が 9.7%、「不十分」が 0.5%であり、とても良い評価をいただいた。

また、「教育実践と教育改革Ⅱ」（選択）の受講者評価結果は更に高くなっている。必修講習 2 日間だけの受講よりも 3 日間の受講の方が、ゆとりをもって自身の実践を省察することができ、今後の展望をひらくことができたものと考えている。

## 4 おわりに

今回の受講者からは、「このような研修は初めて」と評

価する声を多く聞いているし、協力者からは、「ぜひ福井大学方式の継続を」との声もいただいている。「省察」と「協働」を中心に据えた講習に、新たな可能性を感じた者

が多くいることをうれしく思うとともに、福井大学が提案した更新講習のスタイルが波紋を広げ、新しい教師教育につながることを予感している。

## 免許更新必修講習から見たこと

大和 真希子（福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター）

福井大学に着任して数カ月が過ぎようとしている。ようやく「右も左もわからない」状況から脱しかけていた私にとって、免許更新講習必修領域の運営に関わることできたこの夏は、非常にインセンティブな毎日であった。100名を超える「福井県の先生たち」が、免許を更新するという目的で一堂に会する空間。その雰囲気には私はまず圧倒され、恥ずかしながら、気がつけばやはり右往左往してばかりいた。そんな私ではあるが、以下に必修領域に関わる中で考え実感したことを率直に記しつつ、それを自分なりの「ふり返り」の一助としたい。

まずは、「自分の実践経験をまとめ、語る」プロセスの意味を受講者がどのように受けとめたのか、かれらの表情やコメントを思い起こしながら素描してみる。

講習初日の朝、強い緊張感と不安げな表情を携えて着席する受講者は決して少なくなかった。私の方が緊張してしまうほど、会場の雰囲気は緊迫していたように思う。しかし、少人数形式のセッションを通して、次第にその表情は明るみを増し、時間を重ねるにつれて笑顔も垣間見られるようになった。おそらく、日々の職務をこなす中において自身の実践経験を「じっくり」と他者に語る機会は、受講者にとってそう多くなかったのであろう。だからこそ、切実に感じている喜びや苦悩を、ある程度さらけ出せることや、自分の思いに他のメンバーが共感を示してくれる空間は心地よいものだったにちがいない。しかも、校種・年齢・専門とする教科の異なるメンバーとの出会いが、多方向からの観点をまじえた交流につながっていたようである。笑顔に身ぶりを交えて自身の失敗談などを語る受講者や、そのストーリーを聴きながら強くうなずき、共に笑う聴き手の姿を、何度となく目にすることができた。

一方で、実践記録をもとに語ることそのものが、受講者に「しんどさ」をもたらしたとも思われる。かれらの多くは、何よりも、これまで大切にしてきた実践経験を記録化する中で、その内容を書き言葉にのせて整理することに頭を悩ませたようだ。ある受講者の「話したいことはたくさんあるのに何をどう書いたらいいかわからない」との言葉は、その戸惑いの強さを物語っている。受講者にとっては、限られた時間のなかで、すでに暗黙知となっている認

知や思いなどを改めて文章化するプロセスは、ある意味で大きな「産みの苦しみ」となったのかもしれない。

ちなみに、新たなチーム編成、つまりクロスセッションという状況も、新たな「不安の種」となったようである。たとえば、「元々のチームのメンバーと語り合いたかった」「せっかく仲良くなれた人たちがいるのだから、新しくグループをつくる必要はなかったのでは」という受講者の意



見は、今後に活かされるべきだろう。長いスパンをかけて紡がれてきた「歩み」を語ること、それを誰よりも「受講者にとって」より意味ある営みにするために、これら受講者の率直な声は貴重な手がかりになるはずだと感じた。

2つ目として、この必修領域にて重視されてきた「省察」という側面について述べたい。当然のことであるが、受講者によって実践経験は違ふし、その経験に対する「ふり返り」の諸相も異なる。しかし、セッションの中で各受講者が語る「教師としての（これまでの）自分」はどれも一様に、喜びや挫折の経験とともに、シリアスかつコミカルに再現されていた。また、その切実な語りを聴きながら、他のメンバーも自分の「これまで」に思いを馳せることができ、大いに勇気づけられたようである。セッション終了後に交わされた「校種も教科も違うメンバーの実践内容を読みながら、結局、子どもを捉える視点は皆同じなのだ気づかされた」や「まるで自分の失敗体験をそのまま聞いているようで、思わず笑ってしまいました」等の受講者の感想は、この時間を通してかれらが、新たな発見や安心感を得たことを裏づけていよう。

しかし、残念ながら、時間の制約によって、セッションが「消化不良」のまま終止してしまった感は否めない。語り合いや聴き合うだけでなく、それを「省察」にまでつなげようとしたとき、何分、時間が足りなかったとの受講者や協力者の声は多かった。やはり、「時間との戦い」を余儀なくされる状況では、受講者の意識が伝えることよりも急いで報告することに向けられがちになる。そうなることや

はり、他のメンバーとの交流を軸に自身の実践を「振り返る」余裕が持たなくなってしまうのではない。

受講者の「これまで」や「今」とどまらず、「これから何をすべきか」「今後の自分はどうか」を展望する契機となるために、より深く豊かな「省察」を講習においてどのように保証すべきだろうか。これもまた、今後に向けた大きな「宿題」のひとつになりそうだ。

## 拠点校だより

### 福井大学教育地域科学部附属小学校教諭 安井豊宏・名葉浩行

本校では「つながり合って育つ」を研究主題に掲げ、長期に渡り「子どもの育ち」に焦点を当てた研究を進めています。子どもたちは、日々の学校生活の中で、仲間や事象、教材、教師等のかかわり合いの中でつながり合い、新しい自分をつくっていきます。その営みの繰り返しが、子どもたちの育ちへとつながっていくと考えています。本校の研究は、様々なつながり合いのもとに学んでいく子どもたちの姿を考えるとともに、それを支える教師のありようについても考えていく研究、言い換えれば学校全体を包み込む研究であるとも考えることができます。

今年度は“協働して学びを深める授業をつくる”をサブテーマにして、授業の中で仲間とつながりながら様々な学びをしていく子どもの姿を見出していこうと考えていま

研究を進めていく上で大切にしていることは、「見合う」「語り合う」「読み合う」という教師の協働研究です。低・中・高学年部会ごとに公開授業を行い、子どもたちの姿を話し合う授業研究会と実践記録を読んで話し合うバズセッションなどを行なっています。

公開授業に向けては、それぞれの部会で、子どもたちの現状をもとに協働して学びを深める授業づくりについて考えていきます。子どもたちの協働する姿、さらに学びを深める姿をどのように引き出すか、今年度のサブテーマへの迫り方を話し合います。そして、授業後の研究会では、そのときの子どもたちの協働の場面や学びが深まった場面について、具体的に話し合っていきます。具体的な子どもの姿を出し合うことで、一人一人の学びがどのようなものであったか、知ることもできます。

バズセッションでは、それまでの実践記録をもとにして、“つながり合って育つ”子どもの姿や“協働して学びを深める授業”について考えていくことができます。実践記録は、単元を通しての子どもの姿を追いながらまとめてあり、子どもがどのようにして学びを深めていくのか、そのときの教師の思いはどのようなものであったかを知ることができます。このバズセッションには、教職大学院の先生方や本校の研究助言者の先生方にも参加していただき、本校職員にとってもよい刺激となっています。

このような授業研究会やバズセッションを通して、教師一人一人に価値観のすり合わせや意味の捉え直しなど、様々な波及効果をもたらしていくことができました。教師



す。そのため、低・中・高学年の3つの部会に分けて、それぞれの学年で見られる子どもの姿を出し合いながら研究を進めています。

が協働で研究を進めていくことで、教師間のつながりが密になり、授業観や教材観について影響を与え合うことができるのです。また、教師の協働によって育てたい子ども像を共有していく中で、子どもに培いたい力とは何かを考え、学年間の学びの連続性についてより具体的に考えていくことができていると実感しています。

また、教師の協働だけではなく、子どもたち同士で協働できるような場を設定し、つながりを実感できるような活動に取り組んでいます。本校では、低・中・高学年を単位として活動する行事（学団活動と呼ぶ）があります。これは、季節ごとに、主に野外で行なっています。

高学年の夏の学団活動は、自然の中での活動を通して、高学年の団結を高めるとともに、10月に行われる運動会に向けて、各色の結束を高める大きな意味を持つ活動です。今年は、若狭湾青少年自然の家を拠点に行われました。総合の時間や学活の時間を中心にして、子どもたちを中心にして計画・準備を進めました。1日目のカッター漕艇では、

5つのグループに分かれ、みんなで力を合わせて漕ぎました。指導員の指示に従い、二人で息を合わせて漕を持ち、海にこぎ出しました。額に汗をにじませ、学年、クラス、色を超えて団結する大切さを改めて感じました。夜の応援練習では、6年生がこれまで考えて、練習してきた運動会の応援を5年生に伝授しました。各色とも歌、ダンス、かけ声など工夫を凝らしたものを真剣な表情で自分たちのものしようとする姿が見られました。2日目の海の活動も磯遊び、グラスボート、ボート、組み立ていかだに分かれ、協力しながら活動できました。野外炊飯でも、慣れない火起こしに苦戦しながらも縦割り班ごとに協力して焼きそばを作り、おいしく食べることができました。異学年の仲間とともに活動することを通して、高学年としての意識を高めることができたと思います。これらの活動を通して、6年生は5年生をしっかりとリードすること、5年生は6年生をフォローすることの大切さを、目的を達成して喜びを分かち合う中で感じる事ができたと思います。

## 院 生 紹 介

### 山内 康司 やまうち やすし

(福井県立藤島高等学校)

平成21年度福井大学教職大学院に入学した山内康司です。福井大学は私の母校です。昨年の集中講座から四半世紀ぶりに度々福井大学を訪れるようになり、学食や理科教棟に入ると、自分が当時にすうっと戻ったようで不思議な気持ちになることもあります。時々、藤島高校の卒業生に「何してるんですか!？」と学内で声をかけられる時はいっぺんに現実に引き戻されます。

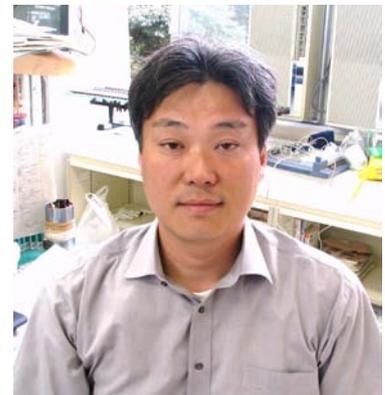
1学期は、福井大学教育地域科学部附属中学校の研究集会をはじめとして、長畝小学校、進明中学校の理科の授業を参観させていただく機会を得ました。小・中学校の授業を参観させていただくのは、教育実習以来でしたので、とても新鮮でした。実験や観察を通して子ども達一人ひとりが生き活きと授業に臨み、グループで話し合いながら探究してゆく姿に驚きました。

私は、高校でこれまで行ってきた多人数知識伝達型に偏

った自分の授業を見直し改善してゆきたいと考えています。大学院の先生がたやメンバーの先生には、職場

にお越し頂いて、アドバイスをいただきながら取り組んでいるところです。9月16日の公開授業では、たくさんの院生の皆様に参観いただき貴重なご意見をいただくことができました。本当に有り難うございました。

このNewsletterが出る頃は、いよいよ長期実践報告への構想が固まる時期かと焦る毎日ですが、3年担任としての日々の受験指導と授業実践とをバランスよく両立させながら残りの大学院生活を充実させたいと思っています。どうぞよろしくお願いたします。



## 高間 祐治 たかま ゆうじ

(福井市至民中学校)

本年度4月より、福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました高間祐治です。今年度、移転開校2年目の至民中学校に赴任しました。今まで勤務した中学校とは全く異なる異学年型教科センター方式で進められる学校運営の斬新さや、20年ぶりに学生となる教職大学院生活と環境の変化が重なり、毎日無我夢中で生活している今日この頃です。

私はこれまで河野小学校、河野中学校、明倫中学校、森田中学校と勤務してきました。この間、勤務する各学校ごとにすばらしい諸先輩に恵まれ、生徒指導や部活動指導の在り方について事細かく教わってきました。部活動に関しては、明倫中学校時代にバスケットボール部、バレーボール部、軟式野球部と学校の都合で3つも代わり、森田中学校ではサッカー部といくつもの運動部の顧問を経験してきました。その度ごとに部活動における生徒指導と技術指導を教わってきました。また、生徒指導では、対処的な生徒指導ではなく積極的な生徒指導が大切であることを学び、明倫中学校や森田中学校では生徒指導部長を務めさせてもらうなど経験を積んできました。

しかし、一番大切な教科指導については後回しにしてきたような気がします。もちろん中教研の数学部会では十数年間活動し委員長や部長も務めてきていますが、じっくり

腰を据えて、目の前の生徒の実態をふまえた研究はしてこなかったのが事実です。ましてや立場もあります

が、学校全体の研究組織については微塵も考えたことなどありませんでした。そんな中、先にも書いたように至民中赴任と教職大学院入学は一挙に私の意識改革となりました。

夏期集中講座では、至民中学校の学校改革の歴史と一員となつての4月からの私の在り方を省察し、これから活動に活かすよい機会となりました。

学校においては、9月に行われた学校祭で新たな取り組みを行いました。地域交流タイムと称し、地域の方々に絵手紙やそば打ちなど14講座を開設していただき、温かい雰囲気の中で、内容深い交流ができました。

現在は落ち着いた環境の中、10月23、24日の公開研究会に向けて問題解決型学習を深め、協働的な学びを追求しています。是非「進化する至民中学校」をご覧いただきたく、公開研究会に足を運んでいただきたいと願っています。



## 辻村 完 つじむら たもつ

(福井県教育庁嶺南教育事務所)

今年の夏休み、忘れられない1冊の本との出会いがありました。集中講座 Cycle2 (実践の架橋理論の検討)において手にした、『コミュニティ・オブ・プラクティス』です。今春、教職大学院での学びを終えられた先輩方の実践レポートの多くに載せられていたのがこの本でした。

「これさえ読めば、きっと答えが見つかる・・・」そんな甘い期待をもって、読み始めました。二日間、1冊の本に向き続けるという経験をしたことのない私にとっては、辛い時間もありました。また、アメリカの企業を舞台に書かれた本であるだけに、難しすぎて、読み進めることがで

きない箇所がいくつもありました。Cycle2のあとも時間をとって、どうにか読み終えることができたのでした。

この『コミュニティ・・・』は、福井大学教職大学院での学びにおいて、理論的な土台の一部となっているとも言える1冊でした。「実践コミュニティ」を、学校現場においては「校内研究」や「研究組織」などに置き換えて、多



くの院生や大学の先生方とともに考え深めることができました。しかし、学校現場では、自発的な組織にはなり得てないし、自分たちで作りに上げていくことも十分とは言えないのが現状です。

さらに、私としては、自分自身の学び方・生き方についても考えさせられました。これまでの私自身の振り返りのポイントとして、次の3つがありました。1つ目は「自発的、自主的、自由な学びであったか」、2つ目は「守破離であったか」、3つ目は「求め続けてきたか」です。3つのポイントとも、十分なものではありませんでした。つまり、これまでの23年間の教職生活は一言で言って、「与えられてきた自分」であったことに気付かされました。

## 北典子 きた のりこ

(福井市明道中学校)

本年度から、教職大学院スクールリーダー養成コースに在学しております、北典子です。勤務校では、研究主任3年目、昨年度より引き続いて2年生の学年主任も担当しています。どうぞよろしくお願ひします。

私は、福井大学附属中学校に10年余勤務しました。授業づくりと授業改革の重要性、教師の意識改革の必要性など多くを学び吸収しました。まさに『協働研究による学校改革推進』といった教育環境が根付く時期に在職しました。

さて、私の専門教科は音楽です。平成19年度に全国音楽教育研究総合大会(幼・小・中・高・大学)が、福井の地で開催されました。平成16年度から約3年間にわたって校種別に推進した授業研究の成果と、幼・小・中・高の音楽科教育を貫く視点を以下の3点から提案しました。

- 単元(題材)全体の授業構想が不可欠であること
- 単元間の連続性や発展性を検討し、包括した各学年一年間のカリキュラムを構想すること
- 学年間を見通したカリキュラム構想の必要性

(例：中学校3年間・小中9年間など)

こうした指導内容を明確に持つ授業構想は、全教科に通じるものと考えます。1単位時間の授業が「点」であるなら、「点」を「線」へとつなぎ、「確かな学力」を育む指導構想と生徒主体の授業づくりを求めて実践に取り組んでいます。

また、今期の学習指導要領で明記された「習得」「活用」

今までの自分に反省し、それでは、どのように実践コミュニティを構築していくといいのか、これが今の課題となっています。私は、「校内研修の在り方」を実践研究のテーマとしています。年々、多忙化が進んでいる中で、どのように校内研修を深めていく必要があるのかについて学んでいく予定です。『コミュニティ・・・』の中に出てくる「一種の芸術」「様々な形態がある」「人が中心の概念」「求め続ける姿勢」「自然なリズムで」などの言葉を中心に考え、望ましい校内研修の在り方を明らかにしていければと考えています。この教職大学院での学びから、「与えられてきた自分」ではなく「自ら求める自分」に変革することを目指して・・・



「探究」というキーワードに着目しながら、附属で「習得」した理論と実践を、公立校である明道

中学校で「活用」する方法を模索中です。附属の実践方法を単にコピーするのではなく、本校生徒の実態や地域・家庭の環境などの特性に応じた方法を同僚との協働研究から見出したいと思います。そうした協働研究の進化を支える拠り所は教職大学院であり、私自身の学びの深化と還元の基盤を生み出す場だと捉えています。この5ヶ月間、グループで多くの仲間と意見を交わす語り合いの中で、自分の課題解決の視点や方法に気づき、新たなヒントも得ました。「協働する力を有する教員を育成し、あらゆるコミュニティと協働関係を築く実践力の向上を図る」大学院の意図を実感しています。

今後は、互いの実践報告重視の学び合いだけでなく、新たな視野を拓くために、多岐にわたる専門的な情報や理論にふれることができたらと願ひます。また、各グループで練り合った課題を全体で共有し合い、議論を交わす中で解決策を探る活動にも魅力を感じます。真摯に学ぶ環境の中で有意義な時間を分かち合い、学びを深めたいと思います。

## 高橋 彰男

たかはし あきお

(若狭町立瓜生小学校)

早いもので、大学院での研修が始まって半年が過ぎようとしています。この間、今までとは異なった視点で学校という組織をみたり、自分自身の授業改善に取り組んだり、大変有意義な時間を過ごすことができたように思います。

さて、私の勤務する瓜生小学校はベテランの先生ばかりで、それぞれ自分の進むべき方向性や課題をしっかりと持って日々の教育活動に邁進しておられます。その先生方がこれまでの経験を生かして教育活動を進められるのを個々の単位で見れば、すばらしい個性や能力が集まっているとみることができます。しかしそれを組織としてみたとき、その歯車がうまくかみ合っているうちはいいのですが、いったんかみあわなくなってしまう場合や、個々の力を集団としてみた時に1+1を3にしたり、4にしたりするためには、互いがどう向き合っていくか、そしてどういう取り組みを進めていけばよいのか、普段から考えておくことが大切であることに気づきました。

私自身、大学院に行く前までは、自分自身のそれまでの経験に頼り、一年一年が終わった時点で、その年度に取り組んだ内容を自分の中で振り返り、1年間間に使ったプリント類を綴って段ボール箱にしまいこんでいました。でも、それを個人の経験としてだけでなく学校の職員全体の

経験として、また一人の作業としてだけでなく職員の共同作業を通していくことで学校の共同財産としていく組織化の重要性について考えるようになったのです。

このように私が考えるようになったのは、平成19年に参加した筑波での中央研修がきっかけでした。その研修でマネジメントの考えに初めてふれ、新しい視点として学校を組織としてみることの大切さを学んだのです。そしてその思いが自分の中で大きくなり、大学院でさらに勉強したいと考えるようになりました。

今年、私は学級担任を外れ、教務主任として学級だけでなく、学校全体の教育活動をマネジメントする立場の一翼を担うこととなりました。この立場から本校の教育課程のより一層の充実と、学校組織としてのあり方についての研修を進めていきたいと考えています。



## 多田 敏明

ただ としあき

(坂井市立長畝小学校)

今年度より教職大学院スクールリーダーコースに入学した多田敏明です。長畝小学校に勤務し今年で4年目になります。今年は、6年の担任の他に研究主任も担当しています。校内研究については、今までどちらかという受け身的な立場でしたが、今年からは企画・推進していく立場に変わり、何から取りかかればよいのか戸惑いながらの新年度のスタートでした。

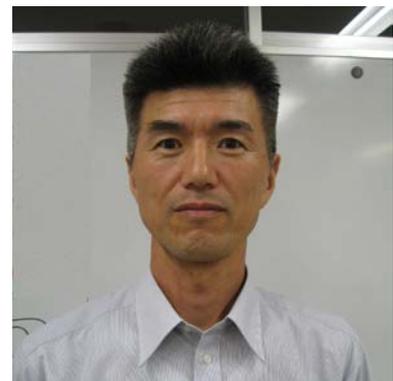
そんな中で、教職大学院の合同カンファレンスやラウンドテーブルで多くの先生方や大学院生、大学院の先生方と意見を交換したり語り合ったりしていくことは、校内研究の活性化や組織のあり方を考えていくうえで大変参考となっています。同じような立場にいる先生方と一緒に勤務

校の実態や課題について、本音を交えながら話し合うこともできました。

また、他校種の中学校や高等学校、

養護学校の先生からも研究や実践に対する考え方やそれぞれの教育観等を知ることができ、自分自身にとっても大変貴重な時間でもあります。

夏の集中講座では、これまでの教員生活を振り返り、自分の教育観や自分が今まで求め続けていた「仲間」について考えてみました。また、著書「コミュニティオブプラクティ



ス」を読み合い、職場のコミュニティについても考えていきました。この講座を受け、8月末の校内の研究部会では部会メンバーと一緒に1学期の校内研究を振り返り、2学期からの研究について話し合いました。また、この部会には大学院の先生方にも参加していただき貴重なアドバイスをいただくこともできました。

本校の今年の研究テーマは「いきいきと活動し、学び合う児童の育成」です。子どもたちが生き生きと表現したり互いに学び合ったりする活動を通して子どもの成長を図っていききたいと考えています。そのためには、特別なイベント方の授業や活動にとらわれるのではなく、毎日の授業など普段の実践の積み重ねが大切だと考えています。また、

職員同士も普段からお互いにコミュニケーションをとることで、教材や指導方法について情報交換したり、効果的な指導や学級の悩みなどについて語り合ったりして、そこから自分の実践に生かしていくことを目指しています。今まで職員それぞれが多数の実践を積み重ねてきていますが、それを整理し職員間で共有することにより個人の力量と組織力アップにつなげていきたいと考えています。私自身の研究はこれからですが、各学校の進んだ研究や実践を参考として、今後一つ一つ試行錯誤しながら進めていきたいと思っています。この2年間で多くの先生方と語り合い多くのことを学んでいききたいと考えています。

## 佐藤 康裕 さとう やすひろ

(あわら市芦原中学校)

こんにちは。芦原中学校の佐藤康裕です。本校2年目となりました。今年度は研究主任と2年学年主任を務めています。学校祭も終わり、そろそろやるべきことをやらなければと、少しずつ自分にプレッシャーをかけています。

教師生活を振り返ってみますと、生徒指導と部活動に明け暮れた2年間でした。大変なことも多々あったわけですがとても充実していたと思っています。しかしそれと平行して置き去りにされていたことも。教師としてやはり大切なことは「授業」。授業研究に真剣に取り組んでこなかった自分がここにいることに気づいたのです。未だにその日暮らしの授業。このままでは納得のいかない日々が続きそうだと感じたのです。

そんな時、この教職大学院と出会い、心が揺さぶられました。自分を向上させたい、同僚の先生方と一緒にこの芦原中学校に何らかの変革を起こしたい、と研究とは全く無縁だった私が、授業改革に取り組むことになったのです。出会いとは不思議なものです。

「協働」「子どもの変容を見とる」「コミュニティ」…今まで聞いたこともなかった世界に入った当初は不安だらけでした。しかし、大学院の先生方やスクールリーダーの

先生方と話していくうちに、どんどん引き込まれ、今では少しですが自信を持って研究を推進できているかな、と思っています。

今年度、本校は「よくわかる授業作り」に教師一丸となった取り組んでいます。すぐには成果が出ないと思いますが、焦らずに、先生方と楽しんで研究推進ができればと思っています。本校の先生方は生徒思いでやる気満々の人ばかりです。芦原中学校をさらに良くしたいと思っています。これからの芦原中学校を見ていてください。

「本物になるには時間がかかる」。これは私の持論ですが、まずはとにかくやってみる。うまくいかなくてもそこからまた考えてやってみる。その繰り返しは本物になる近道かと思っています。

これからも教職大学院生として多くの方々と出会えることを楽しみにしています。よろしくお願いします。



教職大学院第1回国際フォーラム  
and 福井市至民中学校第2回公開研究会  
and 教育シンポジウム  
「福井の教育 フィンランドの教育」  
福井県教育委員会と福井大学のジョイント開催案内



2009年10月23-24日に福井大学教職大学院主催の第1回国際フォーラムと、福井市教育委員会特別研究指定校である至民中学校の第2回公開研究会、及び、福井県教育委員会と福井大学の共同企画シンポジウム「福井の教育 フィンランドの教育」が同時に同一会場で開催されます。これは、大学と学校と行政のコラボレーションが実現した点や、2日間にわたる催しであることはもとより、3者の取組の経過が流れを一にしてまさにコラボレーションしたという点で画期的なことでしょう。

福井大学の教職大学院は、全国で唯一学校拠点方式を採用しています。学校の課題を学校で同僚教師と協働して解決する大学院をめざし、学校に大学院を置きました。

至民中学校はその学校拠点として、ストレートマスター・現職教員の院生及び大学教員を兼務する教員がいる中核的な拠点校です。さらに至民中学校の建物は、空間と時間(カリキュラムや学校運営)の融合を念頭にデザインされ、教師教育の視点をも盛り込んだ学校建築です。これにかかわって、生徒指導・部活指導・受験指導中心の教育の在り方から、21世紀の知識基盤社会が求める学力の育成をめざし、様々な取り組みがなされています。

一方、福井県は文科省が行っている全国学力・学習状況調査(2007・2008・2009)で3年連続して最も優秀な成績を収めているばかりか、全国体力テスト(2008)においても全国トップの県です。これは、福井県に子どもの成長に適した生活学習環境が整っていることに加え、福井県の教師の日々の努力と研鑽の賜物だと考えられます。福井県の教員の力量も全国トップクラスなのです。全国学力検査の結果が公表されるようになって、学力検査の点数を上げる試みが全国で行われるようになってきましたが、重要なのは学力検査の点数を上げるのではなく、『学力』を上げることです。この点、福井県が教師力を高めようとしていることは、穿った見方なのでしょう。

今回のジョイント開催は、生徒の主体的な学習活動、つまり思考力・判断力・表現力を培うための教育の基盤を明らかにしようとしている点で、大学も学校も、そして行政も目的を同じくしています。幸い OECD 生徒の学習到達度調査(PISA)で、世界トップのフィンランドからハッカライネンご夫妻をお招きして、福井が培おうとしてきた『学力』と、それを支える教師の協働の仕組みについて両国を対比しながら、よりグローバルな視点から見直しをしようと考えています。特に、至民中学校の具体的な授業の取組みを取り上げ、深く検討したいと思いますので、ふるってご参加ください。

期日 2009年10月23日(金)24日(土)

場所 福井市至民中学校

内容☆23日午前

① 9時50分-11時 教育シンポジウム

「福井の教育 フィンランドの教育」

シンポジスト：ハッカライネン(オウル大学)

広部正紘(福井県教育長)

②11時より

地域ボランティアガイドによる至民中学校見学

☆23日午後

③13時より 70分授業の公開

④14時20分より 生徒主催の全体会

⑤15時50分より 授業研究会

☆24日午前

⑥9時より 開会セレモニー

⑦9時15分-10時45分 6つのワークショップ

⑧11時00分-11時45分 講演会

「フィンランドの教育、そしてナラティブな教育」

ハッカライネン(オウル大学)

福井大学教育地域科学部附属中学校研究会

# 授業のプロセスとデザイン

シリーズ 学びを拓く《探究するコミュニティ》

探究しコミュニケーションする授業をどう実現していくか。学び合うコミュニティをどう培っていくか。福井大学教育地域科学部附属中学校の実践の歩みを伝えるシリーズです。(1巻・6巻は近刊です。)



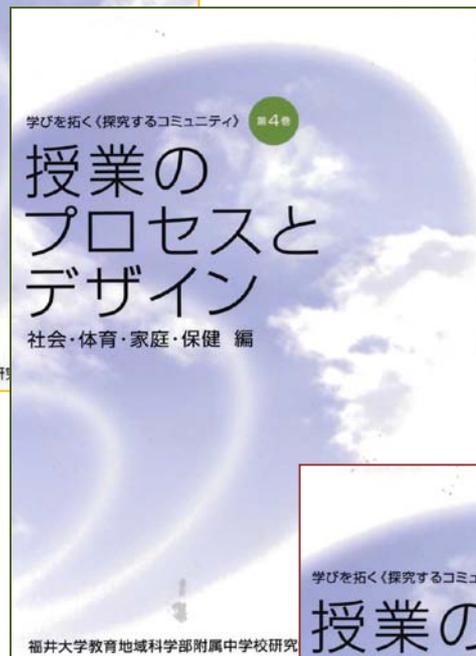
## 第2巻 国語・音楽・美術・英語編

本書は、教師自身が授業をふりかえり、他の教師に語り、語り合った内容を踏まえて書き表したものである。授業は一人の実践ではあるが、ここでの実践事例は多くの同僚の眼を通した共有される実践事例になっている。(松木健一)



## 第3巻 数学・理科・技術編

本書は、数学・理科・技術の授業を事例に、子どもたちの協働探究の展開と省察的コミュニケーションの様相を実践記録として示した上で、それを支える教師の探究的で省察的な授業デザインの営みを教師自身が明らかにし、さらにその実践の意味を大学教員がそれぞれの立場で紡いでいくものである。(遠藤貴広)



## 第4巻 社会・体育・家庭・保健編

附属中学校の学びは「探究」と「コミュニティ」という二つのキーワードを持ち続けてきた。それはいずれの教科においても、教科外においても、そして子どもたちだけでなく教師にとっても共通のキーワードである。本巻では、その学びを「社会科」「家庭科」「体育」「学校保健」の授業実践記録を通してみることができる。(松田淑子)

## 第5巻 総合的な学習の時間 編

本校では、総合的な学習の時間を“学年プロジェクト”と称し、実践を重ねてきた。学年プロジェクトはその名のとおりに、学年単位で、一つのプロジェクトを推進していく取り組みである。この実践には際立つ特徴がある。・子どもたちが話し合いながら、3年間を貫く主題を決めること。・実行委員会が組織され、活動の企画、運営がその手に委ねられていること。・チームと学級や学年など、多様なコミュニティが結びつきながら、課題に取り組んでいること。・文化祭やレポートづくりなど、常に表現することを意識しながら活動を展開していること。(竹澤宏保)



お問い合わせは柳沢までお願いいたします。(yanagi@edu00.f-edu.fukui-u.ac.jp)

10/23 (金)  
24 (土)

### 福井市至民中学校第2回公開研究会 学びと生活の融合

-異学年型教科センター方式を運営する-  
※内容の詳細は10頁をご覧ください

〒918-8032 福井市南江守町 65-20 TEL 0776-35-3840

### 越前市立武生東小学校研究発表会

心豊かでたくましい児童生徒を育む道德教育の在り方

会場 越前市立武生東小学校 (公開授業) 13:00~

〒915-0076 越前市国府2丁目9-12 TEL 0778-22-0367

会場 越前市文化ホール (全体会) 15:00~

越前市高瀬2丁目3-3 TEL0778-23-5057

10/28 (水)  
13:00-16:45

11/3 (火)  
9:00-16:20

### 福井大学教育地域科学部附属幼稚園 幼児教育研究集会

伝え合う ひびき合う

~遊びの中で友達とかかわる姿をみつめて~

公開保育 9:00-11:30 全体会 13:30-14:40

学年別分科会 12:40-13:20 講演会 14:50-16:20

〒910-0015 福井市二の宮4丁目45-1 TEL 0776-22-6687

### 福井市明道中学校公開授業

提案授業 13:35-14:25 研究協議会 15:00~

〒910-0017 福井市文京2-5-1 TEL 0776-20-5126

11/4 (水)  
13:35~

11/27 (金)  
9:00-16:45

### 福井大学教育地域科学部附属特別支援学校 第12回教育研究集会

自分らしく生きる学びの創造 <2年次>

全体会 9:00-9:50

指定授業・公開授業 10:00-11:10

ポスター発表 12:30-13:00

特別講演 13:00-14:40 分科会 15:00-16:45

〒910-0065 福井市八ツ島町1-3 TEL 0776-22-6781

[編集後記] 夏季休業中に行われた平成21年度福井大学教員免許状更新講習必修領域の取り組みについて報告させていただきました。また、10月開催の国際フォーラムの概要も掲載しました。多くの皆様との対話、交流を楽しみにしています。

教職大学院 Newsletter **No.16**

2009.09.30 発行

2009.09.30 印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp